

これだけは
押さえない！

物語文・説明文 指導のポイント

小学校 説明文 指導のポイント

「見方・考え方」それ自体の獲得を

和歌山信愛大学教授 小林康宏



教材で働かせ、育てる見方・考え方を吟味する

小学校新学習指導要領が完全実施となった。今回の指導要領で各教科の目標の筆頭に掲げられているのは「見方・考え方」を働かせるということである。見方・考え方を働かせ学習課題の解決を達成すると共に、指導事項の達成を図るという構造となっている。

また、本時働かせた見方・考え方は本時一回限りのものではない。学習指導要領解説第一章総説に『児童生徒が学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせることができるようにすることにこそ、教師の専門性が発揮されることが求められる』とあるように、次に同様の課題に直面した際にも働かせ解決していくことが求められている。

整理すると次のようになる。

○見方・考え方を働かせて、本時の学習課題を達成し、指導事項の達成を図る

○本時働かせた見方・考え方をその後の課題解決等においても働かせられるように指導・支援していく

当然のことながら説明文を指導する際にもこれらのことは踏まえる必要がある。

では、どのような「見方・考え方」を働かせることが求められるか。このことに関しては学習指導要領の「情報の扱い方に関する事項」に書かれていることが参考となる。

そのうち「情報と情報との関係」からキーワードを見ていくと、一、二年では「共通、相違、事柄の順序」、三、四年では「考えとそれを支える理由や事例」「全体と中心」、

五、六年では「原因と結果」を取り出すことができる。また「情報の整理」からは三、四年では「比較や分類」、五、六年では「情報と情報との関係付け」を取り出すことができる。なお「情報と情報との関係付け」は「小学校学習指導要領解説国語編（以下、解説）」を参考にすると「分解、一般化、類推、系統化」といった考え方がみとれる。

説明文の指導では、発達段階に応じて子ども達がこれらの見方・考え方を使い課題を解決していくことと共に、見方・考え方それ自体を獲得していく授業づくり、単元づくりを目指したい。

「構造と内容の把握」で見方・考え方を働かせる

【情報の扱い方に関する事項】に書かれている考え方を説明文で指導する際、「構造と内容の把握」の段階を中心としていくと取り組み易い。

一、二年の「相違」は「いろいろなふね」（東書一下）「どうぶつの赤ちゃん」（光村一下）等が分かりやすい。「どうぶつの赤ちゃん」を読む前に、子ども達に「ライオン」という単語はどちらが強いのか尋ねる。一年生の子どもの達多くは「ライオン」と答える。そこで続けて「赤ちゃんの場合どちらの方が強いのか尋ねる。やはり子ども達の多くからは「ライオン」という答えが返ってくる。

そこで、「実際はどうか確かめてみよう」という目的をもち、「どうぶつの赤ちゃん」を一読する。読み終わつた後「どちらが強そうな感じでしたか」と子ども達に尋ねると「しまうま」という声が返ってくる。その反応を受けなぜしまうまの方が強いと感じるのか比べてみる活動に入る。

このときに大切なことは違いを見出すための「観点」である。印象でしまうまの方が何となく強いと思っていることを観点に沿って情報を取り出していくことで客観的に認識させるのである。

また観点に沿って取り出した情報の理解を促すためには見やすくまとめることが必要である。

表を使うと次のようになる。

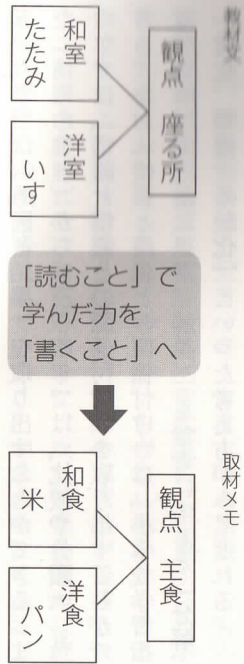
みるところ	ライオン	しまうま	強いのは
大きさ	子ねこ	やぎ	しまうま
目	とじる	あいている	しまうま
耳	とじる	立っている	しまうま
あるく	あるけない	つぎの日からはしる	しまうま
たべもの	二か月おちち	八日目から草	しまうま

それぞれの赤ちゃんの様子を観点ごとに表にまとめていき、比較させることで、しまうまの方がライオンよりも強いと思った理由を子ども達は自覚することにつながる。

この活動を通して働かせた見方・考え方は別の動物同士で観点を決めて相違点を整理する活動で生かしていくことができる。

三、四年の「分類」には「すがたをかける大豆」（光村三下）、「比較」には「くらしの中の和と洋」（東書四下）、「アップとルーズで伝える」（光村四下）等が分かりやすい。「くらしの中の和と洋」は様々な観点から和室と洋室の違いを説明した文章である。

観点に沿って違いを取り出し比較していく。表でも良いがマップの形で整理するとより分かりやすい。マップの形で見方・考え方を視覚化することは、調べ学習の後、二つのものを比較した文章を作成する際にも効果がある。



五、六年の「原因と結果」には「イースター島にはなぜ森林がないのか」（東書六）、「時計の時間と心の時間」（光村六）等が分かりやすい。特定の段落等を使い、原因と結果を対応させる考え方を学ぶ活動を行った後、別の段落等でも同様の考え方を働かせる活動を展開していくことで、子どもたちに考え方が定着していく。

教科書に取り上げられている説明文は、「情報の扱い方に関する事項」で取り上げられている考え方に基づいて書かれているものが多い。

「構造と内容の把握」の段階では、表やマップ等、見方・考え方を視覚的に捉えやすい思考ツールを使うことも視野に入れながら、指導事項の達成と、それを支える見方・考え方を獲得していくことを目指したい。

「精査・解釈」、「考えの形成」「共有」の配慮点

大まかに言って、「精査・解釈」の段階では文章から必要な情報をまとめたり、取り出したりする活動を行う。このとき特に三年生以上にとって大切なことは「目的にこだわる」ことである。ここでの「目的」には二通りあり、書き手の述べたいことを把握するためといった「書き手側」に立つものと、知りたいことを調べるためといった「読み手側」に立つものがある。

授業ではどちらの立場で情報をまとめたり、取り出したるのかといった、情報に対する「見方」を自覚させる必要がある。

ここで気を付けるべきことがある。「知りたいことを調べる」というと、説明文の中から知りたいことを探して読めばよい、文章全体には特に目配りしなくてもよいという印象を受けてしまう。けれども「精査・解釈」について、例えば解説の三、四年では「目的を意識して、アの指導事項で捉えた文章の構造や内容を基に、必要な情報を見付けて要約する」と書かれている。

つまり、「構造と内容の把握」で文章の組み立てや内容を確認に理解しているという前提に立った上で、知りたいことを調べるのである。情報の全体像を把握することなしに、都合の良い所だけを切り取ったような恣意的な読みをさせないということである。「精査・解釈」の活動を充実させるためには「構造と内容の把握」で確かな読みをさせることが求められる。

「考えの形成」では子ども達なりの「見方」に基づき、自分の直接的な経験や読書等による間接的な経験をよりどころにした考えを展開させることを大切にしたい。

小学生にとって説明文に書かれていることは絶対的なものととらえる傾向が強い。例えば「楽しいから笑うことが

基本だけれど、笑顔でいることで楽しい気持ちになる」という主張があれば「ふうん、そうなんだ」と殆どの子は納得するだろう。けれども「とても落ち込んでいるときに笑顔になんてなれるかなあ」といった疑問を投げかけると、教材文の主張に納得していた心は揺さぶられる。

子ども達が出合う情報は常に絶対的に正しいとは限らない。別の角度から見ると必ずしも筆者の述べていることはすべてに当てはまるわけではないこともある。また、別の角度からみることではやはり筆者の主張に納得できることもある。主張だけではなく、事例の取り上げ方や理由付けの仕方も同様だが、教師は、子ども達の見方を拓くような働きかけをすることが必要である。

「共有」も然りである。お互いの文章を読み合い、考えを述べ合うことで、お互いの「見方・考え方」に学び合える活動を展開したい。

最後に授業・単元づくりの際留意したいことを四点述べる。どんな見方・考え方を働かせ課題解決していくのか、子どもが見通しをもつこと。教室にいるすべての子どもたちが見方・考え方を働かせられるような配慮をすること。活動の後、子どもが課題解決のために働かせた見方・考え方の有用性を実感すること。学んだ見方・考え方を働かせる場面をその後の活動の中で、意図的に設けることである。